

【速報】CRNA 国際共同研究：アジア諸国にみる「ハッピー&レジリエントな子どもをどう育むか」

1. 本研究の目的

本研究の目的は、コロナ禍の中においても「子どものウェル・ビーイング」を達成できるよう、“ハッピー&レジリエント（Happy and Resilient）”な子どもを育むための環境のあり方を、家庭、園・学校、国・地域社会の3つの環境側面から明らかにすることです。

2019年12月初旬に、中国の武漢市で新型コロナウイルス第1例目の感染者が報告されてから、早や2年が過ぎました。2022年3月現在もなお、新型コロナウイルスは世界中で猛威を奮い、子どもたちの生活や学びに大きな影響を及ぼしています。このような状況下における「子どものウェル・ビーイング」実現のための仮説として、私たちは“ハッピー&レジリエント”であることが、重要な要素であると考えました。

レジリエンス（Resilience）という単語はもともと物理学用語で、変形されたものがもとの形に戻る復元力や弾力性という意味をもちます。そこから、困難で脅威を与えるような状況を経験したにもかかわらず、よく適応する過程や能力、結果のことをレジリエンスというようになりました（Masten, Best, & Gramezy, 1990）。本研究にて使用する CYRM-R（レジリエンスの尺度）を開発したカナダのレジリエンス・リサーチ・センター（Resilience Research Centre：RRC）長である Ungar 氏によると、レジリエンスとは次のように定義されます：

レジリエンスとは、著しい逆境に陥ったとき、自らのウェル・ビーイングを維持するような心理的、社会的、文化的、物理的リソースを探し求めて手に入れる個人の力と、それらが文化的に意味をもつように提供されるよう、やりくりすることができる個人および集団としての力の両方を指す。

つまりレジリエンスとは、個人の側面だけでなく、その個人を取り囲む環境リソースとの関連性の側面から構成されると解釈される。

またハピネス（Happiness）は「子どものウェル・ビーイング」に直結する概念であり、レジリエンスとハピネスの両方を兼ね備えた“ハッピー&レジリエント”な子どもこそが、現在のコロナ禍のような困難な状況にあっても、状況を楽しみ幸福度を保つことができるのではないかと定義しました。

子どもの成長に周囲の環境が大きな影響を及ぼすことは、ブロンフェンブレナーの生態学的システム理論からも明らかであり、本研究においては、子どもを取り巻く環境要因と“ハッピー&レジリエント”な子どもの育成の関連性を検討します。子どもが“ハッピー&レジリエント”に育つ環境のあり方を考えることは、まだ出口の見えないコロナ時代における子どもへのより良い関わり方を見出すことにつながるだけでなく、今後コロナが収束へ向かったとしても、変化のスピードが速くこの先も何が起きるか分からないこれからの時代を生き抜く子どもを育むことにつながるのではないかと考えます。

子どもを“ハッピー&レジリエント”に育む環境要因を探る我々の試みを評価、観察するには、子どものハピネスおよびレジリエンスを測る適切な指標を採用する必要があります。子どものハピネスを測るには、KINDL と呼ばれる尺度を用います。これは、Ravens-Sieberer & Bullinger (1998)により、子どものQOL（Quality of Life）を広く測定できるように開発されたものであり、QOLはウェル・ビーイングやハピネスの概念に酷似しています。子どものレジリエンスを測るには、カナダの RRC で開発された

CYRM-R 尺度を使用します。双方の尺度は、単純な質問で構成されており、使用が容易です。

なお本研究は、アジア 8 ヶ国・地域（日本、中国、台湾、インドネシア、マレーシア、フィリピン、シンガポール、タイ）の CRNA 理事と連携して、国際共同研究として実施します。アジア 8 ヶ国において同時並行的に調査を実施し、分析を進めることで、互いの国の特徴・課題の共通点や相違点を発見・比較し、互いに学び合い、示唆を与え合うことも本研究の目的のひとつです。

2. 研究テーマ、リサーチ・クエスチョン (RQ)、分析観点

上記を踏まえて、本研究のテーマ、リサーチ・クエスチョン (RQ)、分析観点を以下の通りに設定しました。

大テーマ：

新型コロナ時代における子どものウェル・ビーイング

研究テーマ：

“ハッピー&レジリエント” な子どもをどう育むか

～子どもを取り巻く 3 つの環境側面から考える～（家庭／園・学校／国・地域社会）

リサーチ・クエスチョン：

① コロナ禍の中において子どものハピネスとレジリエンスを規定する因子は何か？

家庭／園・学校／国・地域社会の 3 つの環境側面から明らかにする。

② 子どものレジリエンスは、その子のハピネス（ウェル・ビーイング）と関連性があるか？

分析トピック（観点）：

① 周囲の子育てリソース（親族、お手伝いさん等）、園や学校からの子育て支援の有無と、子どものハピネス・レジリエンスの関連

② 母親の養育態度や意識（子育て面/仕事面）と子どものハピネス・レジリエンスの関連

③ デジタルの子育て活用のあり方と子どものハピネス・レジリエンスの関連

④ 子どもの日常生活や遊びなどのあり方と子どものハピネス・レジリエンスの関連

なお本研究における従属変数は上述の通り、子どものレジリエンスおよびハピネス（QOL）です。一方独立変数は、子どもを取り巻く 3 つの環境側面（家庭／園・学校／国・地域社会）を表す変数として、先行研究等も参考に、母親の養育態度、母親の意識や不安、配偶者サポート、子どものデジタルメディア活用状況、子どものデジタルメディア活用時の親の関わりや意識、子どもの日常生活や遊び、園や学校によるサポート等の変数から、子どもの性別やきょうだい数、両親の学歴や世帯年収等のデモグラフィック要因、さらには各国における新型コロナウイルスに関わる状況に至るまでを設定しました。

これらの独立変数のうち、主要なものを取り出して、従属変数との関連を見るために設定したのが、

上述の4つの分析観点です。本速報レポートの後に続く、8ヶ国の共同研究者によるカントリー・レポートのテーマは、これら4つの分析観点に基づいて執筆されたものになります。

3. 調査の概要

1) 全体概要

- ・調査対象：5歳（園児）または7歳（小学生）の子どもがいる母親
- ・参加国・地域：日本、中国、台湾、インドネシア、マレーシア、フィリピン、シンガポール、タイ
- ・有効回答数：5歳の母親1,973名（全8ヶ国）／7歳の母親1,372名（中国、シンガポールを除く6ヶ国）
- ・調査方法：アンケート調査（オンライン／質問紙）
- ・調査時期：2021年8月～11月

2) 8ヶ国における調査の概要

各国における調査実施時期、調査方法、有効回答数、子どもの性別の内訳は下記の通りです。

表1 8カ国における調査の概要

参加国	日本				中国大陸				フィリピン				マレーシア			
調査時期	2021年9月-11月				2021年9月				2021年8月-9月				2021年9月			
調査方法	オンライン／質問紙				オンライン				オンライン				オンライン			
有効回答数	5歳児の母親		7歳児の母親		5歳児の母親		7歳児の母親		5歳児の母親		7歳児の母親		5歳児の母親		7歳児の母親	
	246		114		264				218		202		250		250	
*子どもの性別 (%)	男児	女児	男児	女児	男児	女児	男児	女児	男児	女児	男児	女児	男児	女児	男児	女児
	45.1	54.9	50.9	48.2	52.3	47.7			46.3	53.2	47.0	53.0	47.2	52.8	50.4	49.6

参加国	台湾				インドネシア				シンガポール				タイ			
調査時期	2021年9月				2021年9月				2021年9月-11月				2021年10月			
調査方法	質問紙				オンライン				オンライン／質問紙				オンライン			
有効回答数	5歳児の母親		7歳児の母親		5歳児の母親		7歳児の母親		5歳児の母親		7歳児の母親		5歳児の母親		7歳児の母親	
	260		251		416		335		136				183		220	
*子どもの性別 (%)	男児	女児	男児	女児	男児	女児	男児	女児	男児	女児	男児	女児	男児	女児	男児	女児
	48.8	50.0	50.2	49.0	50.0	50.0	51.6	47.8	50.7	49.3			50.8	49.2	51.8	48.2

*子どもの性別をたずねる設問については無回答があった。

4. 基本属性の記述分析

本調査の回答者は、5歳（園児）または7歳（小学生）の子どもがいる母親です。対象の子どもについてたずねたところ、5歳児においても7歳児においても、ほとんどが第一子、または第二子（全ての国において、第一子と第二子で約7割以上）でした。子どもの登園登校状況は、国によって顕著な違いが見られました。5歳児においては日本・中国・台湾・シンガポールではほぼ「通常通り登園（97.8～100%）」、フィリピン・マレーシアでは「通常通り登園」と「登園&オンラインのハイブリッド」に分かれ、インドネシア・タイでは「登園&オンラインのハイブリッド」と「登園していない」が半々程度という結果でした。7歳児においては日本・台湾ではほぼ「通常通り登校（94.0～99.1%）」、マレーシア・インドネシアでは「通常通り登校」と「登校&オンラインのハイブリッド」に分かれ、フィリピンではほぼ「登校&オンラインのハイブリッド（93.1%）」、タイでは「登校&オンラインのハイブリッド」と「登校していない」が半々程度でした（表2参照）。

表2 対象児の登園／登校状況

	5歳							
	日本	中国大陸	フィリピン	マレーシア	台湾	インドネシア	シンガポール	タイ
	246	264	218	250	260	416	136	183
	%	%	%	%	%	%	%	%
¹ 登園／登校している	99.6	99.2	47.2	30.8	100.0	13.0	97.8	4.9
² 登園／登校とオンライン保育／授業のハイブリッド	0.4	0.4	51.8	66.0	0.0	47.1	1.5	62.3
³ 登園／登校していない	0.0	0.4	0.9	3.2	0.0	39.7	0.7	32.8
⁴ 就園／就学していない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.2	0.0	0.0
無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
total	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

	7歳							
	日本	中国大陸	フィリピン	マレーシア	台湾	インドネシア	シンガポール	タイ
	114	0	202	250	251	335	0	220
	%	%	%	%	%	%	%	%
¹ 登園／登校している	99.1		4.5	26.8	94.0	41.2		10.5
² 登園／登校とオンライン保育／授業のハイブリッド	0.0		93.1	71.2	2.4	53.7		54.1
³ 登園／登校していない	0.9		2.0	2.0	0.8	0.3		34.5
⁴ 就園／就学していない	0.0		0.0	0.0	0.0	1.5		0.0
無回答	0.0		0.5	0.0	2.8	3.3		0.9
total	100.0	0.0	100.0	100.0	100.0	100.0	0.0	100.0

続いて調査の回答者である母親自身の職業の状況は、5歳児の母親において、日本・中国・フィリピン・シンガポール・タイでは大多数（76.0-95.9%）の母親が有職、一方マレーシア・台湾・インドネシアにおいては約半分（45.0-62.7%）の母親が有職でした。7歳児の母親においては、日本・フィリピン・マレーシア・台湾・タイでは半分以上（53.2～75.0%）の母親が有職、一方インドネシアでは多く（71%）の母親が無職でした。配偶者／パートナーの職業の状況は、5歳児7歳児ともに有職が大多数を占めました。

次に母親の学歴は、5歳児の母親において、マレーシアを除く7ヶ国で高等教育修了の割合がもっとも高い状況でした（ただし国により54.6～93.6%と差異あり）。マレーシアでは中等教育修了の割合がもっとも高く、約6割でした。7歳児の母親においては、マレーシア・インドネシアを除く4ヶ国で高等教育修了の割合がもっとも高く（ただし国により55.9～83.3%と差異あり）、マレーシア・インドネシアでは中等教育修了の割合がもっとも高く、約6割でした。配偶者／パートナーの学歴は、5歳児7歳児ともに、母親と同様の傾向が見られました。

世帯年収は各国において顕著な違いが見られました。5歳児の家庭において、フィリピンでは中位層が大半（96.3%）を占め、マレーシアでは下位層が大半（76.0%）を占めました。インドネシアでは「わからない・回答したくない」との回答が、他国と比べて突出して多く（43.3%）、その他の国では下位層・中位層・上位層に回答がばらけました。7歳児の家庭においても類似の傾向が見られました。

最後に本調査実施時期が新型コロナウイルス感染症の流行状況下であることをふまえ、コロナにかかわる設問に対する回答の傾向も紹介します。まずコロナに伴う世帯収入の変化は、5歳児7歳児の家庭ともに、「変わらない」との回答がもっとも多かった（約63%）のは日本のみであり、インドネシア・タイでは、「減少した」との回答がもっとも多く、約6割を占めました。その他の国では「減少した」と「変わらない」が半々程度でした。なお新型コロナワクチンの接種状況については、5歳児7歳児の母親ともに、台湾で「未接種」と「接種済み」が半々程度であり、それ以外の国では7割以上が「接種済み」でした。

（小川 淳子）

5. 変数の相関分析

ここでは、次の5つの観点から、8カ国の全てのデータを概観します。

（1）レジリエンスとハピネス（QOL）の各国間比較

今回の調査の目的は8カ国の比較をすることが第一ではなく、それぞれの国で子どものレジリエンスやハピネス（QOL）を規定する因子間の関連の構造を明らかにし、ひいてはレジリエンスやQOLの向上に寄与する要因を探究することです。しかし生活環境や文化の違うアジアの8カ国で、レジリエンスやQOLの程度にどの程度ばらつきがあるのかを見ておくことには意義があるかと思います。

図1は、5歳児のQOLとレジリエンスの8カ国比較を示したものです。

QOLは国によって大きな差はありませんが、レジリエンスがマレーシアで低くなっています。調査時期に、マレーシアでロックダウンを要する新型コロナウイルスの感染者増加が起きていたことが関連しているのではないかと、マレーシアの研究者は解釈しています。

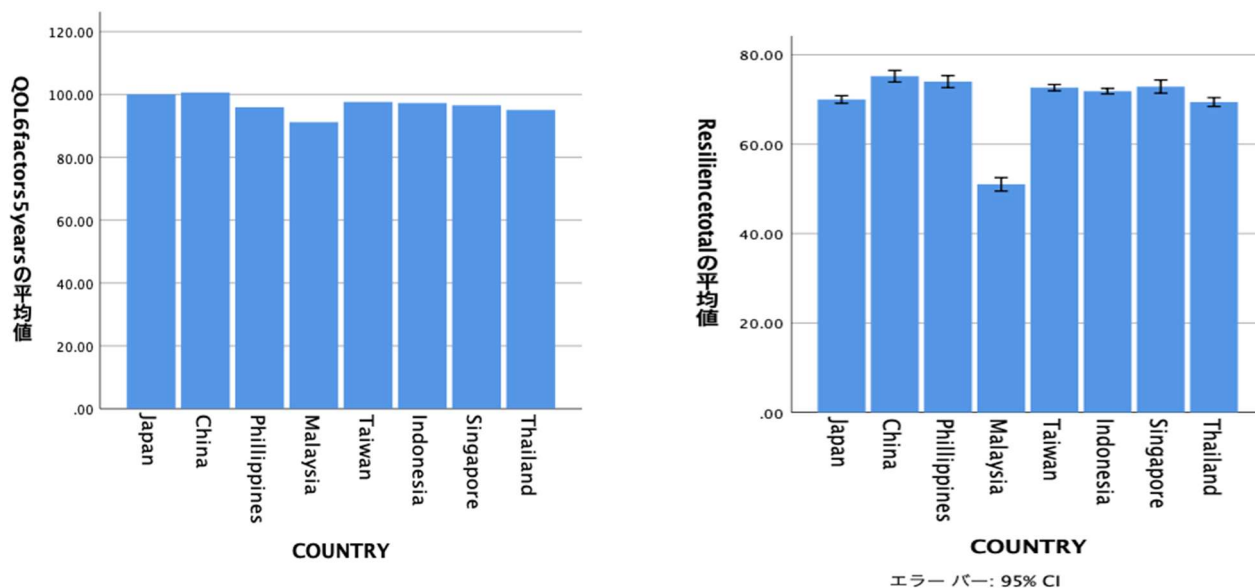


図1 5歳児のQOLとレジリエンス

(2) レジリエンス・QOLと子育て環境因子との関連

今回の調査の準備段階で、子どものレジリエンス・QOLと関連のある子育て環境として何を選ぶのか、多くの議論がありました。レジリエンス・QOLと、様々な子育て環境因子との相関関係は、私たちの作業仮説（モデル）が正しかったかどうか判定されるリトマス試験紙のようなものです。さらに、モデルで選択した子育て環境因子が、文化や歴史の影響によってもある程度普遍性をもったものであるかどうか判定されます。つまり環境と子どもの発達の間には、普遍的な関連があるかどうか、この相関分析によって明らかになります。

図2と図3は、5歳と7歳の子育て環境因子とレジリエンス・QOLの相関関係をまとめたものです。図の中の円は、それぞれの子育て環境因子とレジリエンス・QOLを示し、それらを結ぶ両矢印は2つの因子の間に統計的に有意な相関関係があることを示しています。そして両矢印線上の数値は相関係数（ r ）を表しています。 R の値が0.2～0.4は弱い正の相関、0.4～0.7は中程度の正の相関があるとされます。これらの相関係数の結果から、以下のことが明らかになりました。なお、統計的な有意性の指標である有意確率（ p ）は全て<0.001以下でした。

- ① レジリエンス・QOLと子育て環境の間には、アジア8カ国に通底する弱い～中程度の有意の相関がある。
- ② レジリエンスとQOLの間には、中程度の正の有意の相関がある。
- ③ 家庭外の環境である保育や教育における関わり・サポートはレジリエンス・QOLと正の相関がある。

Correlations among important variables (8 countries) 5-year-old

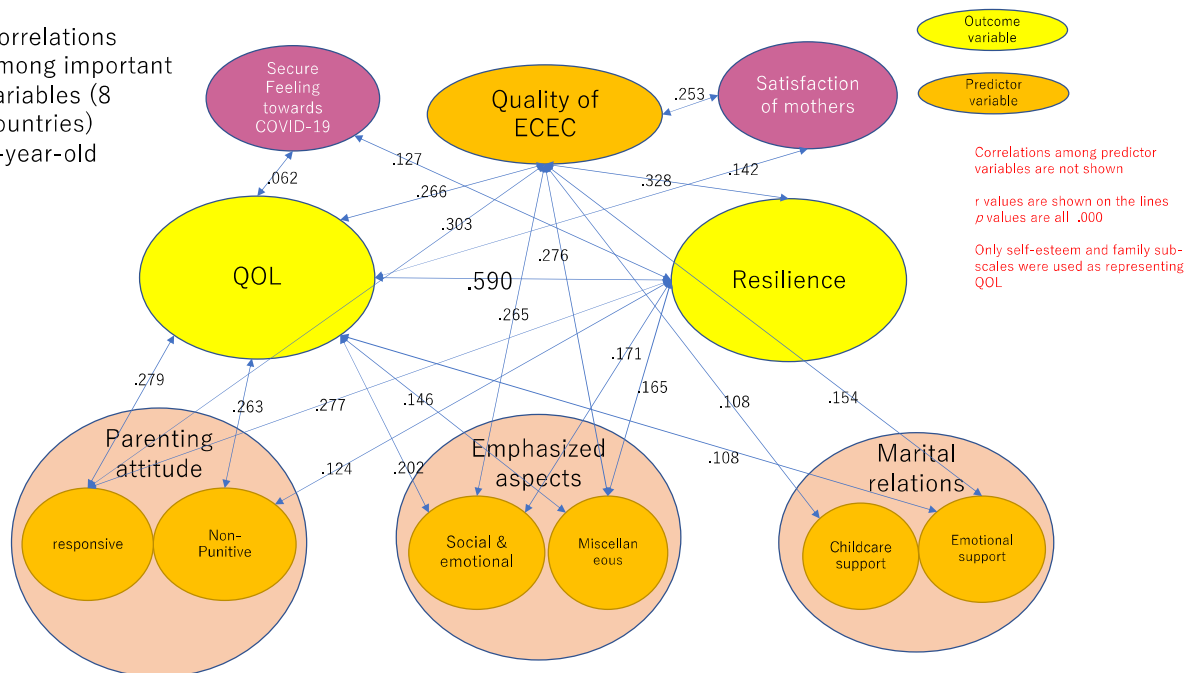


図2 子育て環境とレジリエンス・QOLの間の相関関係（8カ国、5歳）

Correlations among important variables (6 countries) 7-year-old

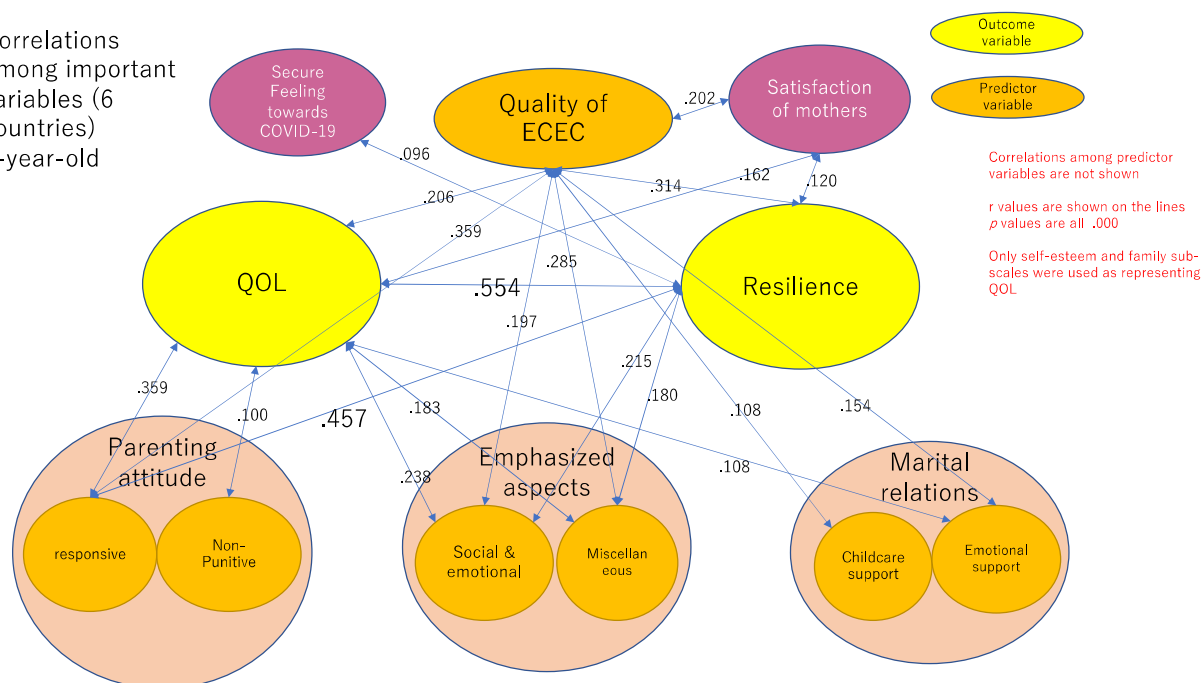


図3 子育て環境とレジリエンス・QOLの間の相関関係（6カ国、7歳）

(3) レジリエンス・QOL を説明する環境因子の探究

相関関係があることは因子間に因果関係があるための必要条件ですが、それだけで因果関係があるとは言えません。回帰分析は、因果関係を証明するものではありませんが、片方の因子が他方の因子をどの程度予測 (predict) あるいは説明 (explain) できるかを調べる統計的な方法です。相関分析で有意な相関のあった因子がレジリエンスと QOL をどの程度説明できるかを重回帰分析で求めた結果のうち、レジリエンスを結果変数 (被説明変数) としたもののみ図 4 (5 歳)、図 5 (7 歳) で示します。左側が説明変数、右側が被説明変数になっていますが、例えば 5 歳児ではレジリエンスを説明する因子として QOL、保育における関わり・サポート、母親の応答的な養育態度、配偶者の心理的サポート、母親が子育てで力を入れていること、そして母親のコロナ感染への安心度などが有意であることがわかりました。R² は決定係数と呼ばれ、この左側の 6 つの因子が、レジリエンスをどの程度説明しているかを示しています。0.425 という値は、決定係数としては大きい方で、レジリエンスは左側の 6 つの因子でかなり説明できることを示します。また 6 つの因子の寄与率が矢印上の数値 (ベータ) で示されています。子どもの QOL (ハピネス) が、子どものレジリエンスと大きく関連していることが明らかになったのです。

図 5 は 7 歳のものです。説明は省略しますが、5 歳と少し様相が違っていることがわかります。また 5 歳、7 歳とも保育や教育環境 (関わりやサポート) がレジリエンスと有意に関連していることがわかります。

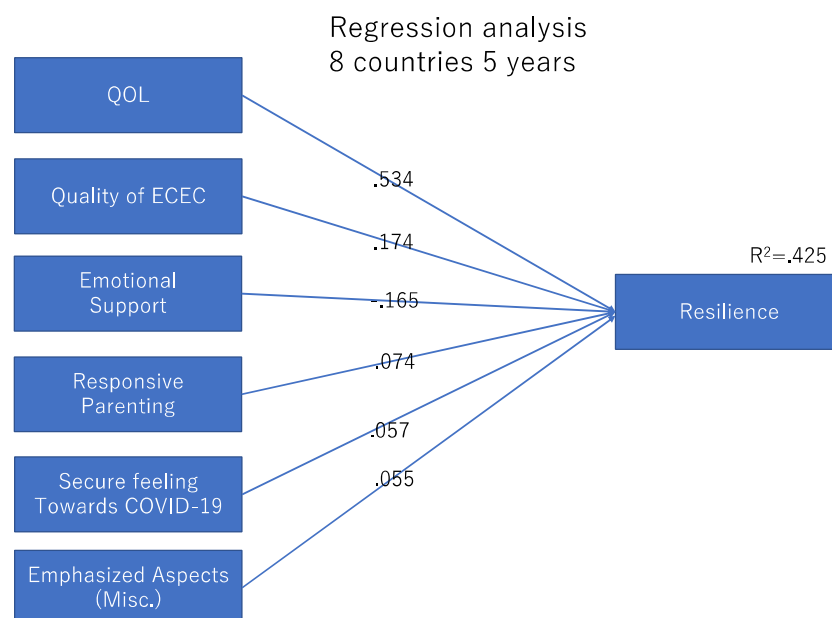


図 4 レジリエンスを説明する環境因子 (8 カ国、5 歳)

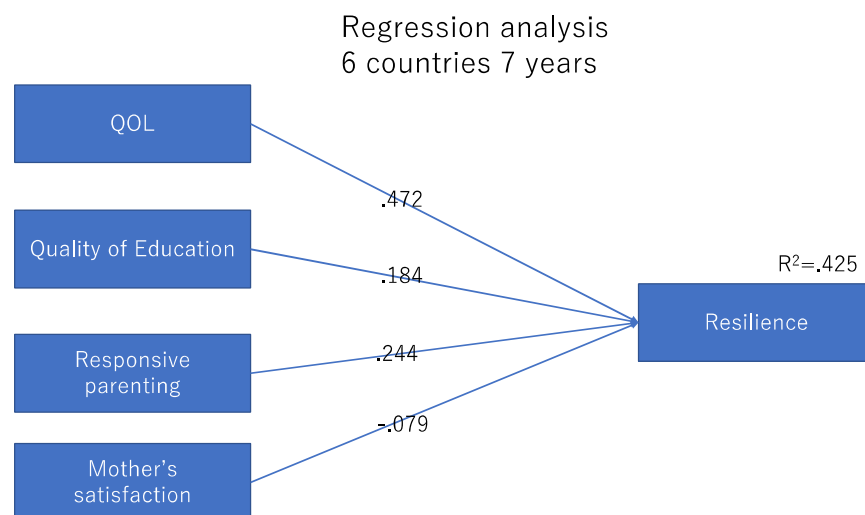


図5 レジリエンスを説明する環境因子（6カ国、7歳）

（榎原 洋一）

（4）レジリエンス・QOL と子どもの遊びとの関連

また、今回の調査では、子育て環境だけでなく、子ども自身の活動がレジリエンスと QOL とどのような関連にあるのかについても分析を進めています。ここでは 5 歳児の結果について紹介します。注目しているのは子どもの遊びとの関連性です。一般的に子どもの遊びは、幼児期の物などを使った遊びや模倣遊びから、次第に対人や集団でのルールやゲーム性を伴った遊びや認知的な活動へと変化し、それらの活動が子どもの知的な発達や身体的な成長に重要な役割を果たしていることが指摘されています。しかしながら、コロナ禍に伴い休園や休校措置が断続的に継続する中、子どもたちの遊ぶ環境は大きく変化しています。そこで、子どもの遊びと発達の関連を明らかにしておくことが必要だと考えました。表3は新型コロナウイルスの感染拡大の状況別に子どもの活動時間の変化を整理したクロス集計です。

表3 ロックダウン・ワクチン接種の状況別 遊び・活動時間の変化（8カ国、5歳）

		日本	台湾	中国	シンガポール	フィリピン	マレーシア	インドネシア	タイ
ロックダウンの状況	ある	12.5	19.2	0.0	25.7	91.2	58.8	48.7	84.9
ワクチン接種有無	接種した	76.4	51.5	95.1	94.1	90.2	95.4	87.4	89.8
【時間の変化】屋外で自由に遊ぶ時間（園や学校、習い事を除く）	増えた	8.1	12.0	8.3	11.1	13.6	30.2	7.3	20.6
	変わらない	44.7	5.9	46.2	23.7	7.9	26.4	13.0	21.3
	減った	47.2	82.1	45.5	65.2	78.6	43.4	79.6	58.1
【時間の変化】屋内で自由に遊ぶ時間（園や学校、習い事を除く）	増えた	53.2	43.5	22.3	55.6	81.2	55.6	41.3	32.0
	変わらない	41.8	24.0	61.4	33.3	16.2	35.0	24.6	37.5
	減った	5.0	32.5	16.3	11.1	2.6	9.4	34.1	30.5
【時間の変化】家庭でのメディアの合計視聴・使用時間（テレビ・DVD、タブレット、スマホ等）	増えた	56.7	70.9	34.5	54.8	87.4	56.6	51.7	61.0
	変わらない	42.8	22.8	50.8	39.3	12.6	31.8	27.4	29.5
	減った	0.6	6.3	14.8	5.9	0.0	11.6	20.9	9.4

8カ国の中でもロックダウンの状況によって活動時間の変化に幅はありますが、全体的に屋外遊びの時間が減少し、屋内遊びの時間やデジタルデバイスの視聴や活用の時間が増加しているという共通した傾向が明らかになりました。こうした遊びや活動時間の変化は、遊ぶ内容や場所、遊び相手にも影響を与えていることが予想されます。そこでこれらの変数を加えた追加分析を行いました。図6は Resilience を結果変数（被説明変数）に、遊びや活動時間、遊び相手を独立変数（説明変数）とした重回帰分析の結果です。



図6 レジリエンスとつながりをもつ子どもの活動時間・遊び相手（8カ国、5歳）

5歳児のレジリエンスを説明する要素として、屋内遊びの時間、家庭学習の時間、遊び相手としての親や近所の友達、園や学校の友達の存在において統計的に有意な正の関連がみられ、一方、屋外遊びの時間やタブレット視聴の時間、自分ひとりの遊びとは負の関連が確認されました。以上の結果から、5歳児のレジリエンスに親や友達との屋内遊びがポジティブな関連をもっていることが明らかになりました。もっとも、レジリエンスは、その国の社会文化的文脈と切り離せない側面があり、同じレジリエンスでも、求められる状況への適応やあるべき姿として捉えられているものが国によって異なっている可能性があります。よって今後の分析では各国別にその傾向を深掘りしていく予定です。

(5) レジリエンス・QOL とデジタルメディア活用との関連

子どもの遊びに加えもう1つ注目しているテーマが、子育てにおけるデジタルメディアの活用です。表3で示したように、今回の調査ではコロナ禍の影響を受けて、家庭でのメディア視聴・使用の時間が大

幅に増加していることが明らかになりました。外出制限等により、これまでのような経験や体験活動を楽しむことが難しい中で、デジタルメディアは、子どもたちの知的好奇心を刺激するさまざまなプログラムを提供してきました。その結果、幼児期の親子にとって、デジタルメディアの存在はますます身近で重要な存在になっていると言えます。一方で、こうしたデジタルメディアを使い過ぎることによる子どもの発達への影響を不安に思ったり、抵抗感をもったりする保護者も存在しています。図7、図8は、国別・目的別にデジタルメディアの使用に対する抵抗感を尋ねたクロス集計です。ここでは5歳のデータを紹介します。

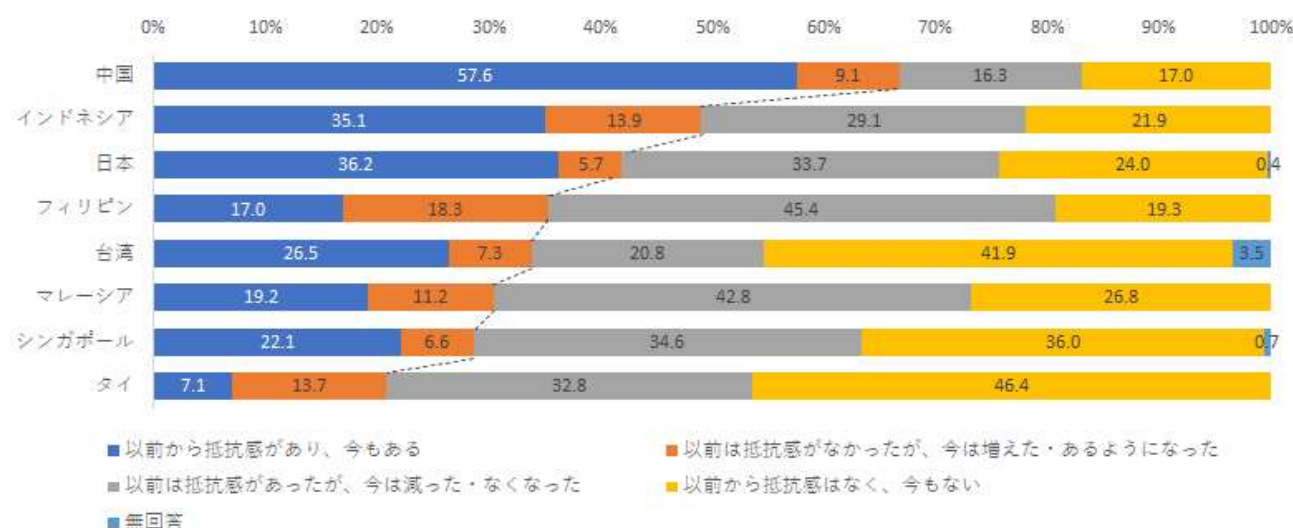


図7 【デジタルメディア使用の抵抗感】 娯楽・遊びとしてのデジタルメディア活用（5歳）

娯楽・遊びとしてのデジタルメディア活用についての結果をみると、抵抗感がある（「以前から抵抗感があり今もある」＋「以前は抵抗感がなかったが今は増えた・あるようになった」の合計％）の比率が高いのは中国（66.7％）やインドネシア（49.0％）、日本（41.9％）です。特にインドネシアは、今回のコロナ禍の中で抵抗感が高まった母親が1割強存在していることが分かります。一方、抵抗感がない（「以前は抵抗感があったが、今は減った・なくなった」＋「以前から抵抗感はなく、今もない」の合計％）をみると、タイ（79.2％）やシンガポール（70.6％）、マレーシア（69.6％）などの国において相対的に比率が高いことがわかります。ただその内訳を確認すると、少し違った特徴が見られます。タイや台湾は「以前から抵抗感がなく、今もない」の比率が高く（タイ 46.4％、台湾 41.9％）、一方、フィリピンやマレーシアは「以前は抵抗があったが、今は減った・なくなった」（フィリピン 45.4％、マレーシア 42.8％）で比率が高くなっています。

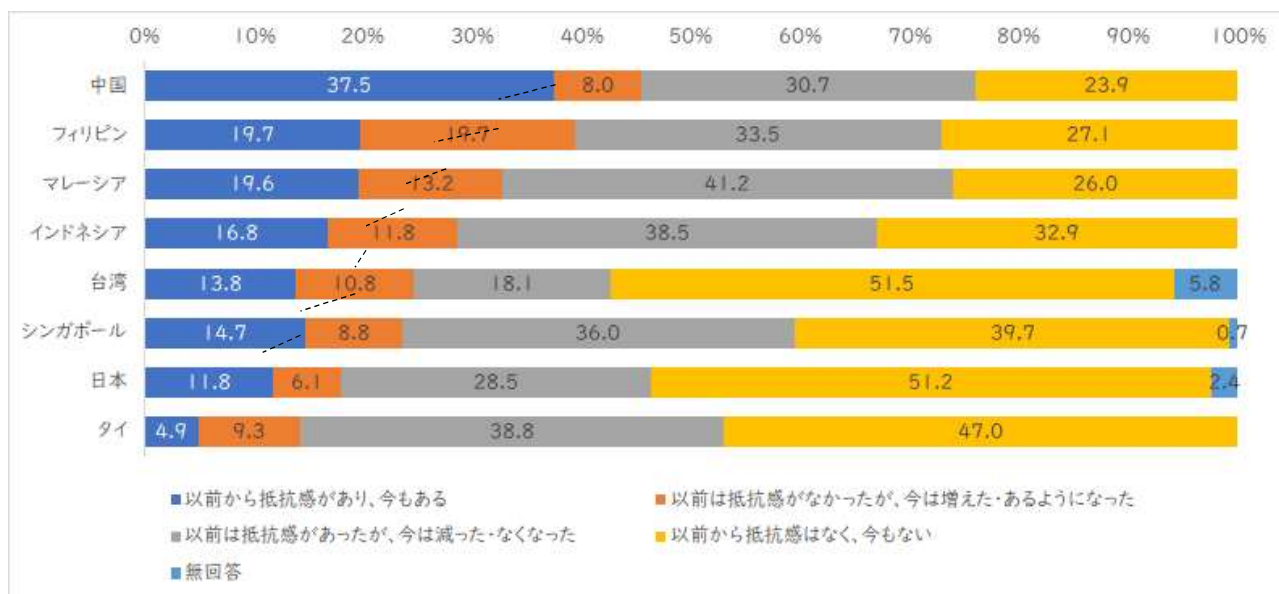


図8 【デジタルメディア使用の抵抗感】 学習のためのデジタルメディア活用（5歳）

続いて学習のためのデジタルメディア活用の結果も確認してみましょう。娯楽・遊びとしてのデジタル活用に比べると全体的に抵抗感は低いことが分かります。抵抗感がある（「以前から抵抗感があり今もある」＋「以前は抵抗感がなかったが今は増えた・あるようになった」の合計%）の比率が比較的高いのは中国（45.5%）やフィリピン（39.4%）です。特にフィリピンは、「以前は抵抗感がなかったが今は増えた・あるようになった」と回答した母親が2割弱存在し、今回のコロナ禍の中で抵抗感を高めた母親が多かったことが分かります。一方、抵抗感がない（「以前は抵抗感があったが、今は減った・なくなった」＋「以前から抵抗感はなく、今もない」の合計%）をみると、タイ（85.8%）や日本（79.7%）、シンガポール（75.7%）などの国で比率が高くなっています。内訳をみると、台湾や日本は「以前から抵抗感がなく、今もない」の比率が高く（台湾 51.5%、日本 51.2%）、一方、マレーシアやタイでは「以前は抵抗があったが、今は減った・なくなった」（マレーシア 41.2%、タイ 38.8%）で比率が相対的に高くなっています。

全体としては、娯楽や遊び目的、学習目的のいずれにおいても母親のデジタルメディア活用に対する抵抗感は着実に減少していると言えます。メディア活用をとりまく環境や意識が大きく変化する時期だからこそ、どのように子育てに取り入れていくべきか、メディアを活用していく上での約束やルールを考えておくことが重要そうです。今後は、子どものデジタルメディアの視聴・活用行動とその際の保護者の関わり方などを中心により深く見ていきますが、そうした行動の背景に存在する、デジタルメディア活用に対する意識にも注目し、行動レベルの変数と意識レベルの変数を組み合わせながら追加分析を行っていきます。

（佐藤 昭宏）

6. まとめ

本速報版でご紹介したのは、本調査に参加したアジア 8 カ国の親の属性（親の教育レベル、世帯年収、新型コロナウイルスによる登園、登校状況）と、目的変数であるレジリエンス、ハピネス（QOL）と子育ての環境との関連、そして近年の子どもの生育環境の中で最も変化の著しいデジタルメディア活用状況、さらに子どもの生活の重要な因子である遊びについての概況です。この総括的な報告の後に、8 カ国からのカントリー・レポートが続きます。

子どもがハッピー（happy）でレジリエント（resilient）であるために、極めて多様な環境因子が関連していることが明らかになりましたが、それは、環境を変えることで子どもの QOL とレジリエンスを向上させることが理論的に可能であることを意味します。今後 8 カ国の研究者との共同研究の中で、今回の調査で得られたデータをさらに精緻に分析し、最終的には保護者や先生、さらには行政関係者に向けた提言として結実させて行くことが期待されます。

最後になりますが、コロナ禍の大きなストレスのなかで、根気のいるアンケート回答にご協力くださった数多くのお母様方に感謝をいたします。

（榊原 洋一）

著者：

榊原 洋一（CRN 所長、お茶の水女子大学名誉教授）

佐藤 昭宏（CRN/BERD 主任研究員）

小川 淳子（CRN 研究員）

参考文献等

- ・小塩 真司・平野 真理・上野雄己, レジリエンスの心理学, 金子書房, 2021
- ・内田 和俊, レジリエンス入門 折れない心のつくり方, ちくまプリマー親書, 2016
- ・Masten, A. S., Best, K. M., & Garmezy, N. (1990). Resilience and Development: Contributions from the Study of Children Who Overcome Adversity. *Development and Psychopathology*, 2, 425-444.
- ・Resilience Research Centre <https://cym.resilienceresearch.org/>
- ・Office of Quality of Life Measures <https://www.kindl.org/english/information/>